

II . 調査研究の結果 (1)

～事件発生現場の実査結果～

1 . 連続少女殺傷事件の概況

1997 (平成9)年3月16日午後零時25分頃、須磨区竜が台2丁目の路上で、小学校4年のS子さんが、金づちで頭部を殴られ重体 (後に死亡)。

この事件の10分後、この現場から北西300m程離れた竜が台福祉センター近くの路上で、自転車で通り掛かった男子少年が小学校3年の女兒をナイフで切りつけた (「付属資料1・2・3」参照)。

2 . 事件発生現場の概略的地理的状況

上記連続少女殺傷事件現場は、概略図1の様な関係にあった。

この第1の事件現場も第2の事件現場も、竜が台小学校を頂点とした小高い一つの山 (丘) の中腹に掛かる、あるいはさらに降りてきた部分となっている。

第1現場であるS子さん殺害事件は、小学校正門から真っ直ぐにだらだらと降りてきた、山 (小学校) の中腹部分に位置する、通学路上で発生した (図1のa地点)。

この通学路には、両側とも団地が位置していたが、学校正面から見て左側の団地の住棟と通学路との間に団地居住者用の自動車置き場 (事件当時は金網フェンスさえも無いただの広場) が設けられていた。

また、第2現場である小学3年女兒の刺傷事件は、第1現場である通学路をさらに降りたやはり山 (丘) の下方の中腹部に位置し、幅の広い街路に行き当って三叉路を形成して、その幅広の街路が再度 (山) 丘に登って行く途中の地点で発生した (図1のb地点)。

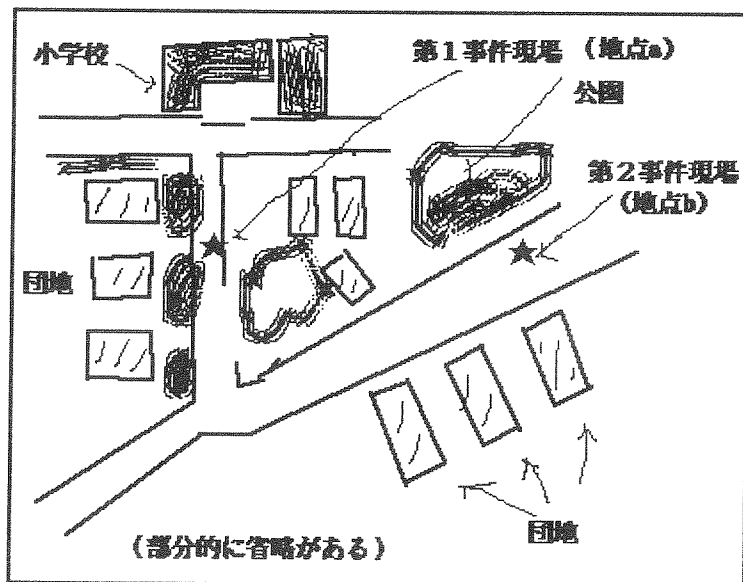


図1 連続少女殺傷事件現場見取図

3. 事件発生現場の精緻な状況

(1) 第1事件発生地点 = S子さん殺害事件現場

S子さん殺害事件現場を精緻に観察してみる(写真1)。

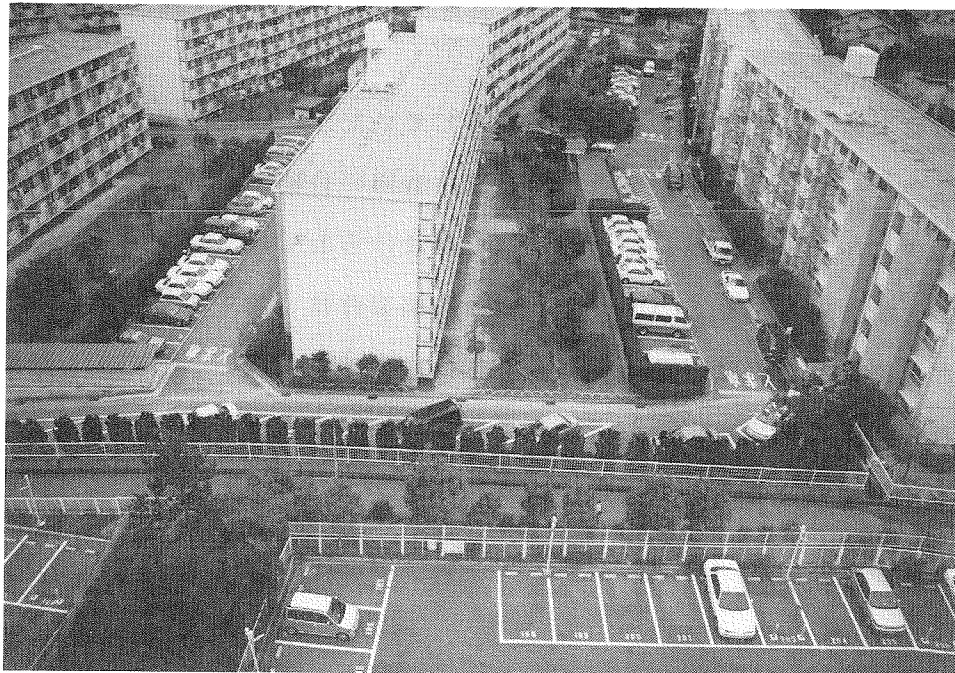


写真1 事件現場の鳥瞰図。手前、日本のフェンスの線に挟まれた細い道路が事件現場。この様に高い位置から見ても、殆ど道路上は見通せない。

事件当時、S子さんは小学校正門前から、通学路となっている直線状の坂道を降りながら三叉路に向け歩いていた（図2）。

この坂道の通学路は、山（丘）の中腹斜面を縦に削って造成されている（図2-2）。こうした造成が、この通学路を空間的に特徴づけるものとなっており、空間的死角を形成する原因となっている。

通学路の幅は、幅員約3m幅で自転車と人間一人が擦れ違うことが少しの余裕を持って可能な幅を保っていた。

先に述べた様に、この通学路は、両側とも団地が位置していたが、学校正面から見て左側の団地住棟と通学路の間に自動車駐車場が設けられており、その自動車駐車場の通学路側の側線には雑草と手入れの悪い灌木が茂っていた。

また、小学校から見て右側の団地には、団地内の敷地に沿って丈の高い植栽が植えられていた。

被害者と加害者の遭遇は、図2に見る様に、小学校前から通学路を三叉路に向け約50mほど降りてくる被害者を追いかける様に加害者が自転車で接近し、電信柱手前で凶行に及んでいる。

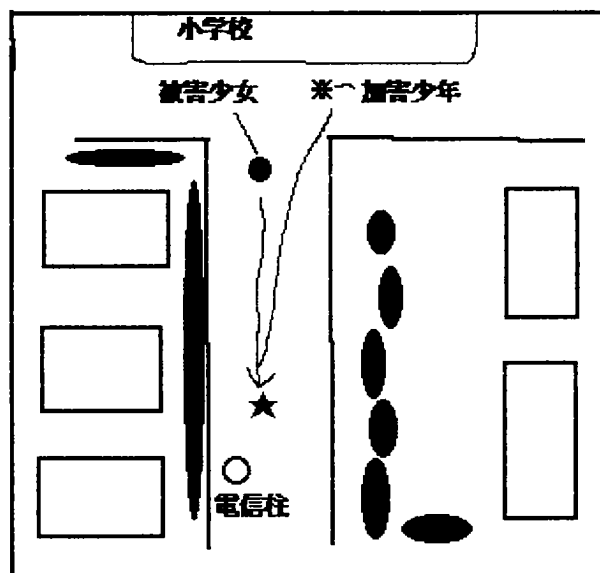


図2 第1事件現場の概観図

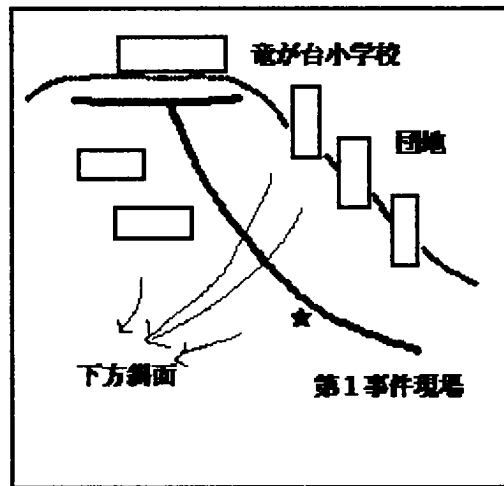


図2-2 第1事件現場の地理的状況

(2) 第2事件発生地点＝小学3年女児刺傷事件現場

事件当時、小学3年生女児は、三叉路から図3の上方に向け歩いていた(図3)。第1事件現場とこの第2事件現場は、約300mほど離れた距離にあった。

被害少女の歩く街路は市街地幹線道路で、幅員約10mほどであった(写真2)。街路の両側には、いずれも歩道が設けられている。

被害少女が歩いていた事件発生側の歩道は、丘の斜面を削って造られており、第1事件現場よりもさらに狭く幅員2m強程で、自転車と人間一人が擦れ違うことに窮屈さを感じるほどの幅でしかなかった。しかも、事件発生部分の歩道は、そこに至るまでのアプローチ部分の歩道に比較し、急に狭く(それまでの歩道の幅員は約4m)、「徳利」の首状を形成している。この幅広いアプローチ部分の歩道からみれば、よけいに狭く、それだけ歩行者が不便を感じる(回避行動ができない)状況を形成している。

この歩道も、先の第1事件現場の通学路と同様、山(丘)の中腹斜面を削って造成されている(図2-2)。